
マイ・スイートルーム

サチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイ・スイートルーム

【Zコード】

N7264C

【作者名】

サチ

【あらすじ】

14歳の誕生日、私の家では初めて一人になることを許される。眞面目なお父さん、陽気な母さん、優しい優ちゃん、明るい周兄ちゃん、そして14歳になる私、加奈。少しづつ家族に起こる小さな変化。大きく成長する私。

特別な日の朝（前書き）

細かくくだらだらした感じ小説が苦手な方は、このお話をそれです。

特別な日の朝

私にとって、誕生日というのはそれまで大きなイベントではなかった。たくさんの人におめでとう、と言われるのも照れくさいだけで、あまり嬉しいことは思わなかつた。

プレゼントだって綺麗な包みをもらつことが私にとって喜びだつたから、中身はなんでもよかつた。

でも今日だけは違つ。

私はすでにわくわくしていた。いつもは母さんに起こしてもらひうまで寝ている私も今日は優ちゃんの声（優ちゃんは必ず朝起きてドアを開けておはよつと声）でパチリと田が覚めた。

「おはよ、優ちゃん」

私が起きたと、優ちゃんは少し驚いて、テレビの音量を小さくした。

「じめんね、起しちゃつたね」

「違うよ。田が覚めたの」

「今日は加奈の誕生日だもんね」

優ちゃんは優しく笑う。そしてコーヒーを飲む。

その優しい笑顔のまま、誕生日おめでとうと書いて私を抱き締めた。

優ちゃんはよく私を抱きしめてくれるけど、誕生日おめでとうと書いて私を抱き締めにいつまでたつてもなれない。

私はなんだかぐずぐずたくてふふふ、と笑つと優ちゃんは体を離して私に囁く。

「あんなに小さかったの」「早いねえ」

私が産まれたとき、優ちゃんは一一歳だった。

母ちゃんはよく囁く。優ちゃんはひたすらあなたを可愛がったのよ、ヒ。

そして父ちゃんも囁く。

優は母さんに負けないくらい加奈の妹だったよ、と。

「14歳だよ、まだまだ小さいね」

「やつだね。でも、大きくなつたよ」

優ちゃんはなぜかいつも元気にながり私に囁く。

「まあ、加奈がいるわ」

陽気な母ちゃんは朝から大袈裟に囁いてみせる。

「おせよいへ、母ちこ」

優ちゃんがまず挨拶して私もおせよいへ、と続ける。

母さんはじめて、と一人言を呴いてキッキンに向かつ。

「加奈、」
「飯食べる前に制服に着替えてきなよ
はあい」

私はスキップをしながらリビングを出て寝室に向かつた。

がらり。

まだ寝ている人もいるのも忘れて私は勢いよく襖を開けてしまつた。

寝室ではお父さんがちょうど畠を覚ましたといひじく、足だけを布団に入れて体を起こしてぼんやりとしていた。

「おはよう……お父さん

「ああ……」

もそもそと口の中であくお父さんを見ながらハンガーから制服をとり、部屋を出た。

私はお父さんが少し苦手だ。ぶつきらぼうなのは知っているけど、いつも無口で何を思っているかわからないお父さん。
だから私は”お父さん”だ。

洗面所の鏡を見つめる。

そこにまつもと変わらない、昨日の私と同じ私がいた。
誕生日になるところも思う。何が変わったのかと。

「ほらほら加奈、お兄ちゃん起きていなこひに食べかけにななこ。
バタバタするからね」

「うん」

母さんがカウンターに並べた朝食をテーブルに持つていき、優ちゃんの隣に座った。

「今日はゆっくり食べられるな」

私は優ちゃんとこでもらひた牛乳を飲みながら田玉焼きに醤油をかけた。

「ほりほり、周も急ぎなさい。お父さんも

周兄ちあんはパジャマのまま席にこて母さんが持つてきた朝食をもそもそと食べる。

お父さんはいつも通り新聞を読みながら朝食を食べる。

優ちゃんはコーヒーだけを飲む。

そして私は田玉焼きに醤油をかけて食べる。

私たちの朝だ。

「周、今日は送つてあげるから

「なんで姉ちゃんと送られて学校行かなきやなんないんだよ」

周兄ちやんは吹き出した。

「どうせ周の高校の近く通りてるんだし。それに周、遅刻ばっかりでしょ」

「わかったよ」

周兄ちやんはいつも優ちやんには負けてしまひ。

私も優ちやんの言うことならなんでも聞いてしまう。

言つことは理論的だし、丁寧だし、何より優しいのだ。

私はそんな周兄ちやんを見ていたら田があつて、小さく誕生日おめでとう、と言われた。

「あつがとつ」

私はすぐ恥ずかしくなつて、すぐにキッチンに田を運んでリビングを出た。

周兄ちやんは小さなころたぐさん遊んでくれたけど、今はそれが恥ずかしくなつていて。

私はかばんを肩にかけ、靴をつっかけて、大きな声で言つてきますと云い、右足から踏み込んで左足で家を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264c/>

マイ・スイートルーム

2011年1月27日05時43分発行